

Subject : **Japanese**Production of Courseware
e- Content for Post Graduate CoursesPaper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**Module 08 : **品詞と活用 (Word Class System and Conjugation)**

ज्ञान-विज्ञान विमुक्तये


**Development Team****Principal Investigator:** **Prof. Anita Khanna**
Jawaharlal Nehru University, New Delhi**Paper Coordinator:** **Prof. Prashant Pardeshi**
The National Institute for Japanese Language and
Linguistics (NINJAL)**Content Writer:** **Prof. Hideki Kishimoto**
Kobe University**Content Reviewer:** **Prof. Prashant Pardeshi**
The National Institute for Japanese Language and
Linguistics (NINJAL)

Japanese

Japanese Linguistics

品詞と活用 (Word Class System and Conjugation)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	品詞と活用 (Word Class System and Conjugation)
Module ID	JPN-P02-M08
Quadrant 1	E-Text

 **Pathshala**
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

品詞と活用 (Word Class System and Conjugation)

品詞と活用

目的：このモジュールの目的は、日本語の語の品詞分類をし、さらに自立語で活用を

もつ品詞（動詞・形容詞（イ形容詞）・形容動詞（ナ形容詞））に関してその活用の

特徴を説明することである。

1. 品詞の分類

品詞は、文を組み立てる際に必要となる部品である。品詞はいくつかの基準によっ

て分類される。その基準は、(A) 自立語となるか付属語となるか、(B) 活用をするかしな

いか、(C) 主語となれるかなれないか、(D) 修飾語となれるかなれないか、などである。

品詞の分類については、さまざまな見解が存在する。なかでも、伝統的な日本語文法

(およびそれに準拠した学校文法) では、(1) にあげるような 10 の品詞が認定される。

(1) たんご 単語	じりつご 自立語	◎ 活用する (用言) ...	だん お ウの段で終わる	どうし 動詞
			お イで終わる	けいようし 形容詞
			お ダで終わる	けいようどうし 形容動詞
	かつよう ◎ 活用しない	● 主語になる (体言)		めいし 名詞
	しゅご ● 主語にならない	○ 修飾語になる		
		しゅうしょくご ○ 修飾語にならない		
		しゅうしょくご ○ 修飾語にならない	ようげん しゅうしょく ・用言を修飾する	ふくし 副詞
			たいげん しゅうしょく ・体言を修飾する	れんたいし 連体詞
		しゅうしょくご ○ 修飾語にならない	せつぞくご ・接続語となる	せつぞくし 接続詞
			どくりつご ・独立語となる	かんだうし 感動詞
	ふぞくご 付属語			
	◎ 活用する		じょどうし 助動詞	
	◎ 活用しない		じょし 助詞	

(1) の分類について少し説明をする。自立語で活用をするものは、活用の形によって

動詞，形容詞，形容動詞に分類される。これらの3つの品詞は、まとめて「用言」と呼

ばれる。活用をせず主語となれるものは、名詞である。名詞は（「用言」と対立するも

のとして）「体言」とも呼ばれる。日本語教育では、形容詞は（連体形が「い」で終

わるため）イ形容詞（例：広い部屋），（連体形が「な」で終わるため）ナ形容詞

れい へ や よ おお ふくし れんたいし かつよう しゅうしょくご
 (例：きれいな部屋) ， と呼ぶことが多い。副詞と連体詞は、活用せず修飾語となる

ご くべつ しゅうしょくさき くべつ しゅうしょくさき ようげん ふくし
 語である。この区別は修飾先によって区別される。修飾先が用言であれば副詞

れい はし しゅうしょくさき たいげん れんたいし れい へ や おお へ や
 (例：ゆっくり走る) ， 修飾先が体言であれば連体詞 (例：この部屋，大きな部屋)

せつぞくし ぶん せつぞく ご れい かんどうし しゅうしょくご
 である。接続詞は文などを接続する語 (例：そして) で、感動詞は修飾語とならずそ

じたい どくりつ ご れい
 れ自体で独立する語 (例：ああ，そうだ) である。

2. 動詞の活用

どうし どくりつ ぶん じゅつご はたら どうし かつよう はんちゅう
 動詞は、独立して文の述語として働くことができる。動詞は活用する範疇で、

かつよう わ ごだんどうし
 活用のタイプによって 3 つのグループに分けられる (「五段動詞」がグループ 1，

いちだんどうし ふきそくどうし はい どうし あらわ
 「一段動詞」がグループ 2，「不規則動詞」がグループ 3 に入る)。動詞は、現れる

かんきょう かたち か でんとうぶんぼう どうし かつよう みぜんけい れんようけい
 環境によって形を変えていく。伝統文法では、動詞の活用は、「未然形」「連用形」

しゅうしけい れんたいけい かていけい めいれいけい せつてい
 「終止形」「連体形」「仮定形」「命令形」の 6 つを設定する。

(2)	ごだんどうし ①五段動詞	いちだんどうし ②一段動詞	ふきそくどうし ③不規則動詞
	い 「行く」	お 「起きる」	く 「来る」 「する」
みぜん 未然	い <u>行かない</u>	お <u>起きない</u>	こ <u>来ない</u> <u>しない</u>
	い <u>行こう</u>	お <u>起きよう</u>	こ <u>来よう</u> <u>しよう</u>
			<u>される</u> <u>せず</u>
れんよう 連用	い <u>行きます</u>	お <u>起きます</u>	き <u>来ます</u> <u>します</u>
しゅうし 終止	い <u>行く</u>	お <u>起きる</u>	く <u>来る</u> <u>する</u>
れんたい 連体	い とき <u>行く</u> 時	お とき <u>起きる</u> 時	く とき <u>来る</u> 時 <u>する</u> 時
かてい 仮定	い <u>行けば</u>	お <u>起きれば</u>	く <u>来れば</u> <u>すれば</u>
めいれい 命令	い <u>行け!</u>	お <u>起きろ!</u>	こ <u>来い!</u> <u>しろ!</u>

活用形は、後に続く助動詞や助詞などにより変化する。(3) はそれぞれの活用形に接続

する代表的な要素である。

(3) 未然:	みぜん すいりょう い し ひてい しえき う／よう (推量・意志), ない／ず／ぬ (否定), させる (使役),
	かのう そんけい じはつ れる／られる (可能, 尊敬, 自発)
連用:	れんよう か こ ていぬい せつぞくじょし すいりょう た (過去), ます (丁寧), たり／て (接続助詞), そうだ (推量)
終止:	しゅうし でんぶん せつぞくじょし そうだ (伝聞), と／から／が (接続助詞)
連体:	れんたい めいし 名詞
仮定:	かてい せつぞくじょし ば (接続助詞)

れんたいけい うし めいし せつぞく ばあい かつようけい どうし れんたいけい めいし
 連体形は、後ろに名詞が接続する場合の活用形である。動詞は連体形であらゆる名詞に

せつぞく れい はし みち か ひと た
 接続できる（例：走る道，買う人，食べるもの）。

にほんご かつよう れきしてき へんか ふる にほんご ぶんご げんだいにほん
 日本語の活用は歴史的に変化している。そのため、古い日本語（文語）と現代日本

ご こうご かつよう こと でんとうぶんぼう せつてい かつようけい かず ふる にほんご ぶんご
 語（口語）では活用が異なる。伝統文法で設定される活用形の数は、古い日本語（文語）

ぶんぼう こてんぶんぼう じゅんきよ げんだいご たいおう
 の文法（古典文法）に準拠している（たとえば、（現代語の「する」に対応する）

こご ふきそくかつようどうし みぜんけい れんようけい しゅうしけい
 古語の不規則活用動詞「す」は、「未然形：せず」「連用形：したり」「終止形：す」

れんたいけい とき いぜんけい めいはいけい かつよう
 「連体形：する時」「已然形：すれども」「命令形：せよ」のように活用する）。この

かつよう げんだいにほんご こうご かつよう げんみつ いっち ふる にほんご どうし
 活用は、現代日本語（口語）の活用とは厳密には一致しない。古い日本語では、動詞の

れんたいけい しゅうしけい けいたいてき くべつ ふきそくかつようどうし しゅうし
 連体形と終止形に形態的な区別があった（たとえば、不規則活用動詞「す」は「終止

けい れんたいけい とき げんだいにほんご どうし れんたいけい
 形：す」と「連体形：する時」）。しかし、現代日本語では、動詞については連体形と

しゅうしけい れいがい つね どうけい げんだいにほんご しゅうしけい
 終止形が例外なく常に同形となる（したがって、現代日本語の「する」は「終止形：す

れんたいけい とき おな ふる にほんご みぜんけい
 る」と「連体形：する時」のように同じになる）。また、古い日本語では未然形が1つ

か げんだいにほんご いがい
 であった（たとえば「書かず」）が、現代日本語においては、（「する」以外は）

みぜんけい かたち か か
 未然形は2つの形がある（たとえば「書かない」と「書こう」）。

どうし へんか ぶぶん へんか ぶぶん い
 動詞は、変化する部分と変化しない部分がある。「行く」は、ik-anai, ik-imasu, ik-u,

かつよう どうし ぜんぶ へんか ぶぶん ごかん
 ik-eba, ik-oo, のように活用する。動詞の前部の変化しない部分は、語幹である。ローマ

じ つづ ごだんどうし ごかん しん お しんごかんどうし よ
 字で綴るとわかるように、五段動詞の語幹は子音で終わるため、子音語幹動詞と呼ばれ

たい いちだんどうし ごかん へんか ごかんぶぶん ぼいん お
 ることがある。これに対して、一段動詞は、語幹が変化せず、語幹部分が母音で終わる

とくちょう お
 という特徴をもつ。「起きる」は、oki-nai, oki-masu, oki-ru, oki-reba, oki-yoo のように

かつよう いちだんどうし ぼいんごかんどうし よ いちだんどうし
 活用する。したがって、一段動詞は、母音語幹動詞と呼ばれることもある。一段動詞は、

ごかん さいご しん お お お
 語幹の最後の子音が i で終わるもの（「起きる」の oki-）と e で終わるものがある

た お ごかん も どうし かみいちだんどうし ごかん お
 （「食べる」の tabe-）。i で終わる語幹を持つ動詞は上一段動詞、語幹が e で終わる

どうし しもいちだんどうし よ ふきそくかつようどうし く
 動詞は下一段動詞と呼ばれる。不規則活用動詞は、「来る」と「する」だけである。

にほんご どうし どうし きたい ぶぶん ごこん どうし じた しめ せつじ
 日本語の動詞は、動詞の基体となる部分（語根）に動詞の自他を示す接辞がつくこ

ごかん けいせい おお じどうし あ たどうし
 とによって、語幹が形成されることが多い。たとえば、自動詞の「上がる」と他動詞の

あ ごかん どうし きょうつう ようそ ごこん
 「上げる」は、それぞれ、語幹が agar-, age- となるが、動詞に共通の要素（語根）で

あ ふく あ ごこん しんごかんどうし
 ある ag- が含まれる。「上がる」は、この語根 ag- に -ar がついて、子音語幹動詞

ごだんかつようどうし あ ごこん ぼいんごかんどうし
 （五段活用動詞）になり、「上げる」は、語根の ag- に -e がついて、母音語幹動詞

しもいちだんどうし
 （下一段動詞）になる。

どうし かつよう おんびん げんしょう お おんびん おと れきしてき へんか ゆらい ほんらい
 動詞の活用には音便という現象が起こる。音便は音の歴史的な変化に由来し、本来

かつよう きそく じっさい はつおん おと さ おんびん とく ごだんどうし
 の活用の規則からはずれて、実際に発音される音を指す。音便は、特に、「五段動詞の

れんようけい かんきょう お おんびん そくおんびん はつおんびん しゅるい おんびん
 連用形+て/た」の環境で起こる。イ音便、促音便、撥音便の 3 種類がある。イ音便

は、カ行、ガ行の動詞に「て/た」が後続する場合に起こる。「書く」は、「て」が

付くと、本来は「書いて (kak-i-te)」となるはずである。しかし、実際には、語幹の

最後の子音 k が脱落して、「書いて (ka-i-te)」となる。さらに、ガ行の動詞では

(「て/た」が「で/だ」になる(「泳ぎで (oyog-i-te)」から g が脱落し、さらに te

が de に変わり、「泳いで (oyo-i-de)」となる)。促音便は、タ行、ハ行(現代語で

はワ行)、ラ行の動詞に起こる。「走る」の連用形に「て」が付くと、本来なら「走

りて (hasir-i-te)」となる。しかし、実際には、語幹の最後の子音+母音の部分が促音

(「っ」)に変化して「走って (hasit-te)」となる(ここでの変化は r-i → t)。撥音便

では、ナ行、マ行、バ行の動詞の語幹の最後の子音が撥音(「ん」)となり、同時

に「た/て」が「だ/で」となる。「読む」の連用形に「た」が付いた形は「読みて

(yom-i-te)」となるはずである。しかし、実際には「読んで (yon-de)」となる。な

お、サ行の動詞は音便を起こさない。その他、一部の動詞に例外が観察される。たと

えば、「行く」はカ行の動詞であるが、「行って」のようになり、(イ音便ではなく)

促音便を起こす。

3. 形容詞・形容動詞の活用

形容詞（イ形容詞）と形容動詞（ナ形容詞）も、動詞と同様に、自立語であって活用をする。したがって、用言のクラスに入る。(4) は、形容詞（イ形容詞）と形容動詞（ナ形容詞）の活用である（○は該当する活用形がないことを示す）。

	形容詞	形容動詞	形容詞	形容動詞
	「美しい」	「静かだ」	「いい」	「同じ」
未然	美しく <u>ろう</u>	静か <u>だ</u> ろう	よ <u>か</u> ろう	同 <u>じ</u> だ <u>ら</u> う
連用	美しく <u>った</u>	静か <u>だ</u> った	よ <u>か</u> った	同 <u>じ</u> だ <u>っ</u> た
	美しく <u>なる</u>	静か <u>に</u> なる	よ <u>く</u> なる	同 <u>じ</u> に <u>な</u> る
終止	美 <u>しい</u>	静か <u>だ</u>	い <u>い</u> (よい)	同 <u>じ</u> だ
連体	美 <u>しい</u> 時	静か <u>な</u> 時	い <u>い</u> (よい) 時	同 <u>じ</u> 時
仮定	美 <u>し</u> ければ	静か <u>な</u> らば	よ <u>け</u> れば	同 <u>じ</u> な <u>ら</u> ば
命令	○	○	○	○

形容詞（イ形容詞）も形容動詞（ナ形容詞）も語幹と活用語尾を分けることができる。

形容詞（イ形容詞）「美しい」は utukusi-i, 形容動詞（ナ形容詞）の「静かだ」は sizuka-da に分節でき、「美し (utukusi-)」と「静か (sizuka-)」が語幹となる。

活用形は、後に続く助動詞や助詞などにより変化する。(5) は、それぞれの活用形に

接続する代表的な要素である。

- (5) 未然： う (推量・意志)
 連用： た (過去), たり (接続助詞), は/も (助詞), ない (否定),
 なる (動詞)
 終止： そうだ (伝聞), と (接続助詞)
 連体： 名詞
 假定： ば (接続助詞)

助詞や助動詞には、動詞にしか付かないものや形容詞の活用をするものにしか付かないものがある。したがって、(5) の接続要素のリストは動詞のものとは異なる。もう 1 つ

注意することは、動詞につく否定の「ない」は、未然形に接続し、「助動詞」に分類される。これに対して、形容詞 (イ形容詞) につく「ない」は、連用形に接続し、「補助形容詞」とみなされる。動詞と形容詞 (イ形容詞) は、終止形と連体形が同形である。

しかし、形容動詞 (ナ形容詞) の終止形と連体形は異なる。たとえば、「静かだ」は、終止形が「静かだ」で、連体形が「静かな人」になる。形容動詞 (ナ形容詞) の活用語尾「だ」は、コピュラ (繫辞, 判定詞) の「だ」とほぼ同じ活用をするが、連体形が

こと けいようどうし しず しず ひと けい めいし
異なる。形容動詞「静かだ」は、「静かな人」のようにナ形となる。名詞とコンピュータの

く あ がくせい れんたいせつぞく かたち がくせい ほん
組み合わせさせた「学生だ」の連体接続の形は「学生の本」である。

ふ きそくかつよう けいようし けいようし しゅうしけい
「いい」は不規則活用をする形容詞（イ形容詞）である。「いい」は、終止形／

れんたいけい そんざい た かつようけい こうたい かつよう だいや
連体形のみが存在する。他の活用形では、「いい」と交替できる「よい」の活用を代用

しゅうしけい れんたいけい もち けいようどうし けいようし
する（また、終止形／連体形で「よい」を用いてもよい）。形容動詞（ナ形容詞）の

おな ふ きそくかつよう れんたいけい ごかん あらわ おな とき た
「同じだ」も不規則活用をし、連体形では語幹のみが現れる（「同じ時」）。その他

つうじょう おな けいようどうし けいようし かつよう おな
は、通常と同じ形容動詞（ナ形容詞）の活用をする。ただし、「同じだ」が「のに、

つづ ばあい ごかん あらわ おな かんきょう
のは」に続く場合は、語幹ではなく「な」が現れて「同じなのに」になる。この環境

がくせい おな おな しゅつげん
では、コンピュータも「学生なのに」のように「同じ」と同じ「な」が出現する。

めいれいけい ふる にほんご ぶんご けいようし けいようどうし めいれいけい
命令形についてみると、古い日本語（文語）の形容詞・形容動詞には命令形があっ

かな めいれいけい かな げんだいにほんご けいようし
た（たとえば、「悲し」の命令形は「悲しかれ」）が、現代日本語における形容詞・

けいようどうし めいれいけい げんだいにほんご けいようし けいようし けいようどうし
形容動詞には命令形がない。したがって、現代日本語の形容詞（イ形容詞）・形容動詞

けいようし かつようひょう めいれいけい らん くはく けいようし
（ナ形容詞）の活用表では、命令形の欄は空白になる。しかし、これは、形容詞（イ

けいようし けいようどうし けいようし つか めいれいぶん い み
形容詞）形容動詞（ナ形容詞）を使って命令文がつかれないという意味ではない。

けいようし けいようし けいようどうし けいようし れんようけい もち めいれいぶん
形容詞（イ形容詞）・形容動詞（ナ形容詞）は、連用形を用いて命令文をつくることが

しず しず めいれいぶん
できる。たとえば、「静かだ」は、「しっ、静かに！」のようにすれば命令文となる。

この「^{しず}静かに！」は、「^{しず}静かにしろ！」あるいは「^{しず}静かにしなさい！」の形容動詞（^{けいようどうし}ナ形容詞）の後ろに現れる「^{うし}しろ」「^{あらわ}しなさい」が^{しょうりやく}省略されたものであると^{かんが}考えることができる。

キーワード：

ひんし じりつご ふぞくご かつよう どうし けいようし けいようし けいようどうし けいようし
 品詞 自立語 付属語 活用 動詞 形容詞（イ形容詞） 形容動詞（ナ形容詞）

